

# ユーラシアンホットライン

## ■ クラブ懇話会開催—参加者限定10人

日時： 10月28日午後2時～4時まで

場所： ユーラシアンクラブ会議室

参加費： 千円

スピーカーとテーマ：

- ① イリヤソフ・ジアンバイ  
(ウズベクスタン・カラカルパキスタン出身亜細亜大学生)
  - ・ 自分の故郷ヌクスについて
  - ・ アラル海塩害の影響について
- ② ガイラット・ジュマエフ  
(ウズベクスタン・タシケント出身立教大学大学院国際経済専攻)
  - ・ ウズベクの経済と暮らし—日本と比較して

### サポーター会員募集

ボランティア有志のスポンサーシップでクラブ会議室が賃貸運営されています。クラブの活動を財政的に支えていただける「サポーター会員」(年会費1万2千円)を募集しています。

## ■ ユーラシア紛争地特別フォーラム開催計画中

貿易センタビル自爆テロ以来続く、米国のアフガン攻略作戦。「対テロ後方支援」で日本の国会の議論も続いています。テレビのコメンテーターから一般市民まで、にわかに総アフガン評論家状態。地道に活動を続けてきたアフガン難民支援団体や

平和活動家の間からは「今頃何を」といった批判も出ています。とはいえ、人々の惨状、国家民族宗教が交錯する不安な国際関係の将来に、「なぜテロは起きたのか」「どうしたら紛争の芽を摘むことが出来るのか」と考えざるを得ません。そこで下記のような

ミーティングを現在計画中です。

アフガンやチェチェンの歴史的背景、テロの原因、国際関係などから考え、NGO関係者、留学生などの意見に耳を傾ける企画です。具体的内容は次号でご案内します。

<特別フォーラム ユーラシアの中心 アフガン、チェチェンから考える>  
「文明の衝突」克服への道—国家、民族、宗教を超えて—

## ■ シカチアリャン村(ナナイ人)住民が「委員会」設置、クラブに「サポート委員会」立ち上げ

山菜加工セミナーの開催や中古ミシン、布地の提供、縫製工場の立ち上げ、文具の寄贈など、10年にわたって、自立支援の活動を進めてきたロシア共和国ハバロフスク区シカチアリャン村で、新たな自立のための活動拠点となる「コミュニティキャンプ」づくりのため住民参加の運営委員会が設置された。

委員会の代表は、ミシンの技術研修のため富山市のカーテン縫製工場「丸装」(東林勉氏経営)に滞在したこともあるニーナさん。委員には、訪問のたびに暖かいもてなしをしていただいた村の住民、ベーチャ(漁師)、前村長のアクタンコ、等、12人の住民が委員に名前を連ねています。全員よく知っている人です。

「シカチアリャンコミュニティキャンプ管理運営委員会」メンバーリスト

- 1 ニーナ ドゥルジニーナ : 支配人 / 村長
- 2 ピョートル ドンカン : 漁民
- 3 ミハイル オネンコ : 漁民、運営ボランティア
- 4 オレグ スースロフ : 猟師

- 5 ピクトリア ドンカン : 教師
- 6 ジャンナ アクタンコ : 教師
- 7 スタニスラフ アクタンコ : 工芸職人
- 8 リーマ オジャール : 魚皮活用技術者
- 9 イリーナ ビリュリョーバ : ナナイ文化伝承者
- 10 エンマ サマール : ナナイ文化伝承者
- 11 エカテリナ ムルジナ : 高齢者
- 12 ニューラ アクタンコ : 高齢者

「(委員会メンバーだけでなく)全ての住民がこうした活動に参加し、村の児童や人々の教育訓練プログラムやカリキュラムづくりを行うと考えている」とニーナ村長は話しています。またキャンプの修理についても「村役場は無職住民やボランティアによる修理作業を組織する」と前向きです。

今回の「委員会」は、今年3月、10年来係争中だったクラブキャンプの管理運営の法的問題が最終的に解決したのを受け、このキャンプを民芸工房や子どもたちのキャンプ、養殖などアムール漁獲の向上、七以後や文化を老人たちから学ぶ教育センターとして利用し、村民の自立の活動拠点となる「シカチアリヤンコミュニティキャンプ」とすることやユーラシアンクラブの交流拠点としての宿泊施設として整備することになったもので、現地の「委員会」の話し合いの結果として、

「(キャンプ地を) 以下のよう  
に使用したい。①毎週、手工芸センターとして②夏季休暇中は児童センターとして③フィッシュファーマーミングの可能性を開発する調査訓練センターとして④毎月、ナナイ語と文化を学習し、継

承する教育センターとして」と回答しています。

キャンプは広さ2ヘクタール。アムール川の岸辺に6つの建物があり、数年にわたって、縫製工場が置かれていたこともあります。秋になれば鮭漁のために村上げて、朝となく深夜となく、一時間おきに舟が川面に繰り出し網を張るナナイ民族の暮らしのフロントのキャンプです。私はかねてここを村人が拠点として使用し、私たちとの交流拠点になってほしいと思っていました。ロシア人、ユダヤ人、少数民族。ロシアの荒廃した社会は夢を壊し、今日まで夢に向かった最初の一歩さえ記すことをさえぎってきました。今回の「委員会」発足は、10年前の夢の実現です。

シカチアリヤン村に「委員会」が発足したのに伴い、ユーラシアンクラブ内に「シカ

チアリヤンコミュニティキャンプサポート委員会」を設置しました。委員長には、クラブ監事をお願いしている木野保幸氏が就任しました。「サポート委員会」は今後、現地との連絡協議を積み重ねて、実現可能な活動を積み重ねていく予定です。現在キャンプ運営上の留意点について、木野委員長の文書を現地連絡し、現地「委員会」の討議をお願いしています。これに確認の連絡がとれれば、キャンプのサポーターの募集を始めます。皆様のご理解ご協力をお願いします。

「サポート委員会」は、来年五月のゴールデウィークに、村民との協力協働の活動を再開するべくシカチアリヤン村およびウデゲの民族村クラスニーラウ村に親睦旅行を実施する計画です。

## ■ 火の国の熱血漢から熱いメッセージ

9月23日(日)、クラブ会議室で行われた「ユーラシアンフォーラム」は、報告者1人、聴衆数人というこぢんまりした規模でしたが、アメリカにおける「同時多発テロ」(アメリカサイド)がこの表現を強調し、世界のマスコミが同調)に象徴される「熱い時代」の到来にふさわしい、熱気に満ちた内容になりました。

スピーカーのザウル・ラスロフさんは、「火の国」が語源というアゼルバイジャン共和国出身にふさわしく、売られたケンカは必ず買う」という熱血漢だそうです(笑)。アゼルバイジャンは古代から、地面にしみ出した石油が自然発火するところから「火の国」と呼ばれ、現在でもカスピ海の石油・天然ガス資源は、その掃蕩をめぐって世界

の政治・経済動向の「火種」であり続けています。同時に「文明の衝突」(ハンチントン)の焦点地域に位置していることも、ご存じのとおりです。

アルメニアとの間のナゴルノ・カラバフ問題、イランとの間の南北アゼルバイジャン問題など、周辺各国との深刻な紛争を抱えているうえ、複雑なカスピ海のエネルギー利権問題の渦

中で苦闘するアゼルバイジャンの状況について、歴史・文化的背景も含めたザウルさんの報告は、普段のマスコミ報道などからは得ることができない、臨場感と祖国愛にあふれた内容で、参加者たちに深い感銘を与えました。

イスラム教問題、ソ連邦解体にともなう独立の経緯、ザカフカス3国（アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア）の相互関係など、参加者の矢張り早な質問に対して、ザウルさんが流暢な日本語でテキパキと応え、活気に満ちたフォーラムとなりました。

した。ザウルさんの対応のうち、アルメニア人の自己宣伝の巧みさの話を聞いて、筆者はアルメニア人、ドーソンの著作「蒙古史」の、モンゴルに対する大げさで過酷な記述を思い出しました。（福井伸彦）

## ■ チェチェン問題懇話会開催される

チェチェン戦争の現実を知ってもらおうと発行が続いている「チェチェンニュース」編集者の呼びかけで、チェチェン問題の現状報告と5月発足した「チェチェンの子どもを支援する会」の活動について話し合う懇話会が開かれました。

現状報告では、モスクワにおけるチェチェン人の生活環境、被災者の子どもの医療、教育等の支援活動に、イギリスのクエーカー教徒クリスハンター氏が活躍してきたが、日本山妙法寺の寺沢潤世氏同様、ロシア政府からビザ発給を停止されたこと。にもかかわらずインギーシで6つの学校を建設するなど奮闘していること、チェチェンの母の会の代表マディナさんが身寄りのない人や病人の支援、ロシア人協力者と戦闘停止のためのキャンペーンをモスクワで続けていること、ロシアのチェチェン人は5万人とも10万人とも言われ、パスポートを持たない難民化したチェチェン人が多くなっており、食べるものもままならない人が多いことなどが報告されました。こうした中で、チェチェンの母親協会から難民キャンプに初冬学校設立の要請があり、「チェチェンの子どもを支援する会」が発足しました。

チェチェンニュースは、4月から発行を始め、5ヶ月間で22号、

A4版で80枚分のニュースを個人の努力で発行が続いています。ニュースの配布先も5通から180通と急速に増えています。今後は、さらに情報を充実させるとがんばっており、懇話会では①ファックス配信の協力者（毎回/週一回3通ほどのファックス送信をしてくれる方）を募集する②集まった原稿の編集作業協力者（毎週/二人ほど）③情報集め協力者（随時）④ロシア語情報の翻訳者（随時）、を募集することになりました。

協力可能な方は、クラブまでご連絡ください。

また、今後チェチェン問題の理解促進のため、学園祭、新聞マスコミ等への働きかけも行うことになりました。

口寺沢氏はその後一時帰国10月3日夕方、東京・飯田橋のポランディアサポートセンターで欧州評議会を舞台としたチェチェン和平のための対話の現状について報告しました。それによると、9月下旬、ロシアの議会代表とチェチェン代表による初めての対話が用意されたものの、評議会が「ロシアのプロパガンダの場」となることをチェチェンのマスハドフ大統領派代表が懸念し、チェチェンの和平のため武器を持たずに立ち上がる市民、NGO団体とともに、いったんはストラスブルグに集まったものの結局大統領

派が開会直前に不参加を決定、不調に終わりました。相前後して開催されたチェチェン人のNGO連絡組織が組織したナショナルコンGRESSもグルジアのトビリシで開催された国際会議もいずれも流会しており、チェチェン和平につながる対話がいずれも挫折の余儀なくされています。その後「テロに対する戦争」と主張するプーチンロシア大統領が「72時間以内にチェチェンの軍事施設を攻撃」と声明を出す緊張する場面を経て、二度目のプーチン声明で、チェチェン戦争は「過去の歴史」を引きずった紛争と発言したことをマスハドフ大統領が話し合いのきっかけになると判断、ロシアとチェチェンの代表が対話することになり、政府レベルの話し合いの糸口が見つかった、と報告がありました。チェチェン人内部には、和平に向けたさまざまな動きが生まれており、まだ統一的意思に達していないこと、マスハドフ大統領派とNGOグループの対話、マスハドフ大統領とプーチン大統領との対話が交錯し、まだまだ和平への展望は危ういものの、ニューヨーク同時テロ事件も視野に入れながら、目を離せない状況にあることが理解できました。報告会では、子どもの教育支援や女性の作業所建設支援のプロジェクトが説明されました。

▼ サシマコム 「江東区ユーラシア文化ルネッサンス事業」が江東区振興会の内部事情から挫折したことに伴い、ウズベキスタンプハラの民族芸能団「サシマコム」の招聘が危ぶまれています。現在最終的に招聘の可否について検討中です。

## ■ サハのバラムイギンさん来日

昨夜遅く、10過ぎに、バラムイギンさんとサハ共和国ハンガラス郡郷土博物館長、教育局幹部の皆さんが会議室をたずねてくれました。井口さん、山田さんと私の三人が最終電車まで懇談しました。話の内容は以下のようなものでした。

今年の洪水は、冬の降雪が少なく厚い氷が発達、雪解けの水がレナ上流から流れてきた祭にこれがダム役割を果たし、レナ川の水が集落を襲ったのだそ

うです。去年に続き、爆撃機がなんどどなく厚い氷を破砕するため爆撃したのだそうです。結局うまくいかなかったそうです。

バラムイギンさんは、現在同郡の助役ですが、日本との交流パイプ役を務めており、また奥さんが現地の旅行会社につとめており、日本からチャーター便を飛ばす計画を進めているそうです。来年夏、時期調整の具合でこちらも参加する計画を詰めたいと思います。私は十数年前

に訪問して以降、極東少数民族から活動を切り開くという考えでこれまで、10年間停滞しています。まもなく、活動のめども立つと考えており、周辺への視野も入れたいと思います。日本でさまざまな話し合いを続けてきたバラムイギンさんのご提案ですので、しっかり受け止めようと思います。

「ハンガラスの歴史」「ハンガラスのこどもが描いた世界」という本を寄贈いただきました。

## ■ ウズベキスタン・サマルカンドの山本雅宣から手紙/11月末一時帰国、ボランティア募集

「今年の夏は日本より涼しいといわれたサマルカンドでした。朝夕のすずしさはすっかり空きの気配です。いかがお過ごしでしょうか。皆様お元気でしょうか。

8月に「地球と話す会」の長澤さんたち一行と会いました。私も丁度ガイドをしていた時でしたので、あまり時間が無く立ち話程度でした。大学に図書を寄贈してくれました。私の学生も会の人たちに日本語会話の練習をさせてもらいました。

8月18日に日本に留学しているガイラットさんが大野さんから教えられたと

いってサマルカンドに来てくれました。カップヌードルのおみやげを持って。嬉しいですね。こういうのは。

私は今年はサマルカンド国立大に籍を置いて、外大、外大付属リツツエでも日本語を教えます。今年も忙しくなりそうです。日本語学習者は170名近くになります。この和は中央アジアでもかなりの数だと思われま

す。増えれば増えるほどいろいろとやらなければならないことが増えますが、カリキュラム一つ満足に作れない状況です。大学院にも日本語コースをつくりたいのですが、専門家がい

ないし、なかなか進みません。まあゆっくりと、将来は次のボランティアの人たちに任せようと。…」

山本さんは、11月27日から12月3日まで、東京国際展示場「ビッグサイト」で開催される旅行博覧会に参加するために一時帰国します。サマルカンドの旅行会社の同行通訳です。「道案内してくれる学生ボランティア」を探しています。全くの交通費程度のボランティアだそうですが、中央アジアの空気を吸ってみたい好奇心ある若者をご存知の方は大野までお知らせください。

◎ (お知らせ) クラブの現地会員であるクラスニーヤルのグリゴリー (漁師、元パイロット) の息子ペーチャ君 (22歳) が結核性髄膜炎で下半身不随で寝たきりになっています。今年1月以降、担当医、及びこの間クラブの医療支援でご協力いただいた山内春夫医師、ハバロフスクからの派遣医ピリムさん、小出町の庭山昌明医師のご協力が必要な医薬、分量などを検討してきましたが脳循環改善剤ベルジミン、強力モリアミンを購入、搬送することにしました。当面の購入資金としてボランティアスタッフの福井伸彦さんからの寄付金を利用させていただくことにしました。ありがとうございます。

(編集後記)今年4月、IBM系のNPO法人 イー・エルダーが始めた「リユースPC寄贈制度」に中古パソコンの寄贈を申請していましたが、9月に入り入荷しました。これでパソコンが二台になり、作業が少し改ざんできます。有難く使わせていただきます。

(発行) NPO法人ユーラシアンクラブ (発行人) 大野遼 (編集人) 井出晃憲  
住所: 〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-13-2 第一広田ビル  
電話/ファックス 03-5371-5548 E-mail:PAF02266@nifty.ne.jp  
homepage:http://homepage1.nifty.com/EURASIANCLUB/